

清代文人の創作様式に関する研究

—『鏡花縁』と『七嬉』を中心に—

学位論文内容の要旨

本論文は、清代後期（19世紀初め）、江蘇省の文人・李汝珍（1763?-1830?）によって編まれた長篇白話小説『鏡花縁』（全100回）を取り上げ、新たな作品像を提示したものである。論文はまず、「はじめに」において、本論執筆の動機と目的、『鏡花縁』の作品としての特徴、本論文の構成について述べたのち、以下のように展開する。

【第一部『鏡花縁』の周辺】 基本事項3点を記述する。

1. 『鏡花縁』について：過去の作品解釈、主な版本・翻訳等について紹介する。

2. 李汝珍について：作者が音韻学に関して豊富な知識を有すること、それらの音韻学的知識が作品の中に存分に生かされていることを指摘する。

3. 許桂林と『七嬉』について：友人許桂林の博学多才ぶりを紹介し、その著『七嬉』にも『鏡花縁』と同様の趣向が織り込まれていることを明らかにする。

【第二部〈縁〉の物語】 作品の書き手と読み手、および作品について、〈圏〉と〈縁〉をキーワードに論じる。

1. 〈圏〉の中にいるもの：『鏡花縁』の登場人物および読み手が「わかるもの」と「わからないもの」の二極に分化する現象を指摘し、この二極の構図が物語の外部、すなわち李汝珍と許桂林との交友、および許の小説『七嬉』にも見えることを確認、李汝珍と許桂林とは、同じものを同じように楽しむ、快樂の共有者でもあったことを明らかにする。次いで二つの語「知音」と「拈華微笑」に注目、前者は音韻学とともに学ぶ「音を知るもの」の意としても用いられており、後者は、花の精の物語によって読み手が笑うという『鏡花縁』の基本構造を示すものであるとする。さらに明清の小説において〈圏〉は「束縛、限界、飛び越えるべきもの、仲間を囲い込むための記号」として用いられていることを明らかにし、許桂林『七嬉』「画圏児」には、単に文字を知る者に対する書き手の冷ややかな視線と、〈圏〉を描く者への好意的な視線が見えることを指摘、〈圏〉（丸）を描くとは〈圏〉（集団）を作り上げることであると、『鏡花

縁』の作者もまた〈圈〉を書く者であると主張する。

2. 〈縁〉の物語：「有縁」の優位性を主張するヒロインと「無縁」であることの利点を説く少女との会話を取り上げ、書き手の姿勢には他より抜きん出ているとする自尊の意識と、それを自ら平均化させようとする客観的な意識との、せめぎ合いがあると指摘する。さらに〈縁〉の有無に対する作者のイメージに踏み込み、作者にとって『鏡花縁』を書くとは、書き手と読み手とのあいだに「笑い合う」集団（圈）を生み出す行為であり、「笑う」ためには種々の学問や遊戯を血肉としていることが必要であるとして、学問、遊戯と「仙品」との類似性を指摘し、「仙品」を口にすることができない「無縁」の者たちは、学問を理解できない者たちの暗喩であり、そこには学問、知識に目を眩ませる者へのからかいの視線があるとする。

【第三部〈半〉の物語】 『鏡花縁』に頻出する〈半〉の文字に注目し、その意味と役割を考察する。

1. 半分の物語： 作品の中で、語り手ないし登場人物によって、〈半〉とは何か、が繰り返し問われていることを指摘する。そこでは〈半〉の字が用いられた直後、「半分」に関する解説が求められるが、これは書き手が、〈半〉字を用いた語を通常の用法からはずれた特殊な意図のもとに用いているためであり、それらの場面は、読み手に〈半〉とは何か、という疑問を持たせると同時に、答える側の力量（遊ぶ力）を示す場としても活用されていることを明らかにする。

2. 『鏡花縁』における〈半〉とは何か：『鏡花縁』で意識的に用いられた〈半〉の字がどのような観念、事象と結びついているのかを5つの段階に分けて検証する。

一、主人公等の海外遊歴の核となる君子国、岐舌国に焦点を当て、そこには共通して「一つのものを二つにするイメージ」の提示、強調があることを指摘、これらは「半分に分けよ」という初学者（読み手）に対する作者のメッセージであり、『鏡花縁』の中心テーマの一つでもある音韻学の基礎「反切」——二字の音をそれぞれ二分して新たな一字の音を獲得する方法——への手引きにほかならないとする。

二、許桂林の小説『七嬉』の一篇「画圈児」を取り上げ、〈半〉の字と「怠惰、ものぐさ」を意味する〈嬾〉の字が密接に関わって登場することに注目、両者は『鏡花縁』でも互いに関係づけられていることから、〈半〉と〈嬾〉の2字は一見、対象を貶めるように見えて、実は作者が自らを評価するために選び取った興味深いことばであり、『鏡花縁』の世界を象徴するものとして位置づけるべきであるとする。

三、小説中、二度にわたって登場する「花カゴ」が、常にその小ささゆえに侮られていること、「花カゴ」（籃＝嬾）の〈半〉なる食べ物が登場人物の窮地

を十全に救っていることを重視、これに『鏡花縁』は〈嬾〉なる者（ものぐさ）が生み出した〈半〉の書物であるという記述と重ね合わせ、ヒロインらが花カゴを携えた道姑に救われる筋書の上位には、読み手が『鏡花縁』を語る書き手に救われる、という同質の状況が想定されていたのだと指摘する。さらに小説末尾に見える「大千世界」と「微少な文章」との対比は、卑小なものが巨大なものを呑み込むという逆説的な哲学を意識した言葉であるとし、〈半〉のものとされる『鏡花縁』と作中の〈半〉の「花カゴ」には、「小」説作者としての李汝珍の秘かな自負が込められているとする。

四、李汝珍が、自らを老子（李耳）の後裔として位置づける記述を手がかりに、『老子』の思想との関連を検証、『老子』の中心思想である「道」あるいはその具体的形象である「フイゴ」と、作品中の〈半〉の「花カゴ」とが、ともに「からっぽ」でありつつ「無尽」の作用を示す点で、高い共通性を有することを指摘する。

五、『鏡花縁』の主軸に女子が置かれていることの意味を考察する。小説では伝統的文人を代表する存在としての老人と、蔑視される存在としての少女が対置されているとし、伝統中国における男女老少の関係、中心からはずれた存在としての女性の周縁性を確認、「小学」と呼ばれる音韻学に携わり、『鏡花縁』なる「小説」を執筆した作者李汝珍もまた、少女たちと同じ側にいる者であること、〈半〉の物語であり、周縁の学の物語である『鏡花縁』には、周縁かつ〈半〉の存在である女性こそがふさわしいと考えられたこと、小説は伝統的な価値観を抱いて中央に居座る男子を、周辺の女子たちが笑うという価値の反転の物語として構想されたものであることを明らかにする。

むすびに：本論文の方法的な特徴と成果を確認し、今後の課題を提示する。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 須 藤 洋 一

副 査 教 授 武 田 雅 哉

副 査 准教授 押 野 武 志

学 位 論 文 題 名

清代文人の創作様式に関する研究

—『鏡花縁』と『七嬉』を中心に—

清代の長篇小説『鏡花縁』は、時代を唐代にとり、中国史上、唯一の女帝・則天武後の治世を舞台に、三人の男たちによる海外遊歴と、百人の才女たちによる科挙受験の物語が繰り広げられる。小説は全体として、古代神話を下敷きとした花の精（仙女たち）の下凡と、古代のシャーマンのための空想的地理書『山海経』に基づく異界訪問、の二つを主要な骨組みとするが、一方、細部への肉付けとして、音韻学、経学、数学、医学、各種ゲーム、動植物、風俗、教育、政治など、様々な学問や遊び、社会現象に関する知識がちりばめられ、百科辞書的な様相を呈する。

このため、この小説は清末以来、科学小説、女性の才能と権利を説いた小説、作者の学識を衒った小説、社会諷刺の小説、雑学と遊戯、議論に終始した失敗作等、毀誉褒貶が甚だしく、しかも魯迅、胡適らの評価から今なお自由でないという、異様な状況の中に置かれて現在に至る。

本論文はこのように分裂し、かつ固定した作品解釈から『鏡花縁』を解き放ち、新たな作品像を構築することを意図したものであるが、その目的はほぼ達成されたと言って過言ではない。ここに示されたのは、〈縁〉と〈半〉の二つの観念を核として、周縁性と無限性とを志向する物語、という従来の解釈とは完全にレベルを異にする作品像であり、その成功は、作者と世界を共有する読者の発見と、多様な作品世界を根源において統括する支配的な視点の発見、によるものと見ることができる。

重要なことは、本論文が提示する作品像は、才学小説、女権小説といった従来の作品理解を否定あるいは排除するのではなく、それらの全てを許容し、しかも、なぜそのような解釈が生み出されてくるのか、を論理的かつ統一的に説明する力を備えていることである。本論文のもう一つの価値は、そこにあると言ってよい。

本論の欠点としては、一、全体に高い論理性を維持する一方、時に定義上のあいまいさ（「笑い」など）や印象批評的な記述が散見する、二、複数の論文の一本化に不手際があり、記述上の重複がある、三、作者の同時代認識に関する検証が不十分である、等が指摘されるが、これらはいずれも致命的なものではなく、本論文の独創性と緻密な論理展開は高く評価しうる、というのが委員の共通した認識である。

以上の結果により、本委員会は全員一致で、申請論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるとの結論に達した。